

研究員の研究概要(昭和62~63年度)

研究題目	研究員
アジアにおける文化交流の研究 <日中・日朝関係の研究>(歴史研究班) 令集解の研究 近世対外関係史 対馬宗家文書による日朝関係の研究 難破唐船の記録の蒐集と研究 長崎薬種貿易の研究 来舶清人の絵画	(幹事)泉 澄 一 奥 村 郁 三 蘭 田 香 融 横 田 香 健 一 橋 田 本 久 林 本 紀 昭 水 本 浩 典 泉 澄 一 松 浦 章 宮 下 三 山 岡 泰 郎 造
<日中語彙交流の史的的研究>(言語研究班) 江戸時代の唐話の研究 日中両国における漢英辞書の研究 漢語史における外国資料の研究 現代中国語の外来語研究	(幹事)鳥 井 克 之 井 上 泰 山 尾 崎 實 日 下 恒 夫 鳥 井 克 之
東西文化交流の研究 <文学・神秘主義の比較研究>(比較研究班) 比較文学研究 近代文学論争譜 W. B. Yeats 研究 Julien Green 研究 Ezra Pound 研究 <i>The Ancrene Riwe</i> 研究 アイルランド文学の研究—Oliver Goldsmith— 神秘主義の研究 仏教の神秘思想の研究 キリスト教の神秘思想の研究—Marsilio Ficino 研究—	(幹事)丹 治 昭 義 谷 沢 永 一 名 取 栄 史 前 原 昌 仁 安 川 昱 和 田 葉 子 坂 本 武 D. イーガン 丹 治 昭 義 M. J. オーガステイン
<東西文化交渉史の研究>(文化交渉史研究班) 『諸蕃志』の研究 技術伝播の研究 水車の技術伝播とその定着過程について 堺綴通の発展過程 明治・大正期における煉瓦造技術について イブン・ジュバイル『旅行記』の研究	(幹事)山 田 幸 一 藤 善 真 澄 末 尾 至 行 角 山 幸 洋 山 田 幸 一 藤 本 勝 次 池 田 修 福 原 信 義

アジアにおける文化交流の研究

〈日中・日朝関係の研究〉(歴史研究班)

『令集解』の研究

奥村郁三・藺田香融・横田健一
橋本 久・林 紀昭・水本浩典

令集解研究班は、昭和54年度の発足以来、各自分担を定め、輪講形式で研究を進めてきたが、巻6まで(官位令・職員令)の引用漢籍の本文校訂が完了したのを機に、同じ部分の総合的な語句索引を作ることになった。

索引作成の作業は、はじめの2年間は、語句カードの作成作業に没頭し、これと併行して、コンピューターによって一字一句索引をインプットした。後半2年間は、五十音順に配列した語句索引の検討と、コンピューター索引によるフィード・バックの作業に費した。この間、毎月1回の例会の他に、10回以上を数える2泊3日の合宿研究会を行い、漸く本年度内に完成・刊行の見込となった。

このたび刊行予定の『令集解^{官位令}職員令語句索引』は、『新訂増補国史大系・令集解』を底本とし、語彙の採取範囲は、法令・官司・官職をはじめ、法制用語はもちろん、地名・人名・物名・典籍名など、ひろく一般事項を網羅し、さらに音韻・助字についても採取し、現今の学界のあらゆる方面からの要望に耐えるものを期した。索引は漢音引とし、五十音順に配列し、さらに各音の部では、漢字の画数順(康熙字典準用)によった。

令集解の索引は、本来、全30巻に亘るものが望ましいことはいうまでもないが、巻7以下の作業を継続する前提として、引用漢籍の本文校訂の作業が必要であること、全巻の索引を完成するには、なお長年月を必要とすること、などを勘按し、本研究班の体制による索引作成作業は、一往ここで区切りをつけ、来年度からは体制を新たに、漢籍校訂の作業を継続することにした。

このような次第で、今回刊行予定の索引は、巻6まで(官位令・職員令)のものでしかないが、古代の官司体系に即した法体制・法運用を探ることが可能となるわけで、それなりの意味ある仕事であると信ずる。本索引の完成によって、日本・中国古代史研究に少なからざる寄与を果たしうるのである。

近世対外関係史

対馬宗家文書による日朝関係の研究

泉 澄一

雨森芳洲関連の史料収集を第一目標に宗家文書の調査をつづけているが毎日記等から断片的な史料を得ているにすぎない。芳洲は元禄11～享保5(1698～1720)年まで朝鮮方佐役であったので朝鮮方記録にある程度史料がまとまっていると考えられるが、そのほとんどは韓国にあり今後を期したい。

一方、釜山窯に関連して19世紀初頭の対州窯について毎日記を中心に史料調査を行なった。当時対馬では志賀・立亀の両窯が知られる。志賀窯は寛政13(1801)年に閉窯したが藩は三年後平田五左衛門の再興願いを認め、藩御用品ばかりか朝鮮むけ(輸出用)の「対馬産伊万里焼物」を生産させている。そのため勘定方の恵作を「茶碗焼下代」に任じ志賀窯に勤務させたがその後記録がなくよくわからない。その点立亀窯は倉田万兵衛の開窯(寛政ごろ)いらい幕末に至るまでつづく。「毎日記」文化4年4月8日条に「右者亡祖父万兵衛御国産之茶碗施据被仰付候以来毎年令永統御国用者素り朝鮮渡共不差支様令心配……」と孫の伝蔵に対する藩の通達があり、その実情がわかる。立亀窯ではこのあと伊万里焼職人を雇い朝鮮向の伊万里焼生産に力を注いでいる。かかる対州窯の実態は今日までまったく知られていない。今後、朝鮮の対馬産伊万里焼受容の問題もあわせて考察してゆきたい。

難破唐船の記録の蒐集と研究

松浦 章

昭和62年4月より2ケ年に渉る筆者の当該研究は、江戸時代漂着唐船資料集三として『寛政元年土佐漂着安利船資料』を刊行した。同書は、中国の長崎貿易船であった安利船が高知県室戸岬の北西にある羽根に漂着し、長崎へ護送された際の土佐藩の資料を蒐集し影印したものである。これまで関係資料のうち公刊されたのは極一部であり、長崎貿易関係の資料には殆ど記録がないものであった。高知県立図書館等の調査によりそれらを明かにし初めて公刊したものである。それらに基づき解題を著した。また同

資料集四として『文化五年土佐漂着江南商船都長発資料』も公刊した。同資料は長江河口の崇明島の商船が土佐に漂着した際の関係資料を蒐集し、清代の沿海貿易の実態の一端を明かにできるものである。この他、清代の沿海貿易船の漂着資料を中心に、寧波における民船、即ち中国以外でジャンクと呼ばれる帆船の経営実態について本所紀要第21輯に「清代寧波の民船業について」を、福建の海船経営の実態については「清代福建の海船業について」（『東洋史研究』第47巻3号、昭和63年12月）を、海難資料により本所要第22輯に「清代客商と遠隔地商業」を発表した。

近世対外関係史の分野では昭和62年5月27日「東アジア世界を巡る「三藩の乱」の情報」を報告した（所報第46号掲載）。この他、江戸時代に参府した琉球使節の記録を基に「清代琉球使節所見到着的北京」を中国の北京故宮博物院・紫禁城出版社より刊行されている『紫禁城』1987年第5期に発表した。正徳新例施行時期の日中関係については「康熙帝と正徳新例」（箭内健次氏編『鎖国日本と国際交流』下巻、吉川弘文館、昭和63年2月）を発表した。

長崎薬種貿易の研究

宮下 三郎

薬種貿易のうち年次輸出入量・価格をしめす資料としては、和蘭ハーグの国立文書館所蔵の東印度会社の商業帳簿が現存しており、これらを使用した研究もあって啓発されることが多い。一方、長崎会所作成の年次輸出入を記入した帳簿類の大部分は、散佚してしまっただけである。さいわい輸入薬種については五ヶ所商人の一人永見屋が作成した「薬種寄」によって、その一端を知ることができる。永見屋文書は県立長崎図書館に所蔵されており、大庭研究員が撮影された東西研のマイクロを使用した。松浦研究員の助力を得てそのほかの資料も採集することができた。現存資料をつき合わせると、輸入薬種の若干については、年次輸入量・価格をある程度復原することが可能になった。任期終了の年でもあり、東南アジア原産の竜腦と鹿兒島藩を中心に産出した和竜腦について、年次輸入量や価格の変動を考慮した考察を『紀要』に報告した。

日本における沈南蘋画風の受容について

山岡 泰造

沈銓は浙江省呉興の画家で花鳥を得意とするが、その画風は明の陳淳・徐渭や清の惲棗といった新興の文人画系（いわゆる呉派）花鳥画とは異り、むしろ明の宮廷画院（いわゆる浙派）の系統を引く職業画家である。しかし明の画院の画風のうちでも林良や陳子和らの粗放な画風ではなく、呂紀系の穏和な画風を受けついただと見られる。ただし浙派の殿将とされる藍瑛のような生氣あふれる画風ではなく、清初にあってはむしろ古風で宋元画風を学ぶといわれていたようである。1731年から1733年にかけて、幕府は沈銓を長崎に招聘したが、それは我が国の室町・桃山・江戸初期を通じて座敷飾・座敷絵などと結びついた宋元趣味に基づくものと思われる。沈銓は日本ではことさらに技巧を誇示したため、その効果は絶大で、南蘋画風を中軸とする長崎派はいうまでもなく、円山応挙や伊藤若冲、与謝蕪村をはじめあらゆる系統の画家に大きな影響を与えた。沈銓自身の滞日は足かけ三年にすぎなかったが、同伴した高乾や高鈞や鄭培といった弟子たちを日本に留め、また帰国後も作品を送りつづけたせいもあって、その影響は持続的である。そのポイントは、一つは細密な写生、一つは華麗な装飾性にあり、二つとも新興町人階級の実学志向と趣味に適合した。日本人画家への影響という点では、日本人の好みをとり入れた弟子達の画風の方がむしろ大きいといえるが、沈銓はいち早く日本における西洋志向を察知して、帰国後は乾隆年間の中国における西洋画風の代表者である郎世寧（1715イタリアより渡来）の画風をとり入れた作品を送ってきている。この郎世寧画風をとり入れた作品群については、果して沈銓の真筆か、あるいはその工房作であるのか、更にまた日本人の沈銓解釈による産物（つまり贋作）か、いろいろなケースが考えられるが、少なくとも沈銓の方でも、日本人の注文や好みに合わせた画風転換が見られることは確かである。ついでながら、画風を日本人の好みに合わせるという点は、江戸時代の来船清人画家に多かれ少かれ見られる現象であるが、沈銓の場合はむしろ衝撃を与えた方が大きい。方濟などは逆にさまざまな画風を描き分けて、日本人に合わせよう

とする気分が強い。

〈日中語彙交流の史的研究〉(言語研究班)

江戸時代の唐話の研究

井上 泰山

唐代以来講師によって連綿と語り継がれてきた虚構の世界は、明代知識人の本格的な整理・改修を経て文字となって紙上に定着し、漸く読本としての白話文学の体裁を整えるに至る。それらは時を移さずしてわが国にもたらされ訓点本に姿を変えて読者に提供され、日本的にアレンジした様々な翻案物をも生み出した。と同時に、それら白話文学の原典を味わうための註釈書が陸續と出来し、さらにそれらをまとめた白話辞書の類も出現する。江戸時代における唐話学隆盛の背後に中国白話文学の流行が大きく関わっていることは否めない。従って、唐話学の全容を明らかにするためには白話文献の詳細な調査が不可欠であるが、本任期中はそのための基礎作業として、当時最も大きな影響力を持ったであろうと思われる長篇小説『水滸伝』に的を絞り、宝暦7年岡島冠山によって訓訳された『通俗忠義水滸伝』をはじめとする各種の翻訳註釈書を蒐集し、それらの比較を通じて、施註語彙選択の基準・語釈の妥当性等を細かく検討した。なお上述の研究成果は、去る1988年1月29日、本研究所に於て「江戸時代における中国俗文学の受容」と題して口頭発表を行ない、『東西学術研究所々報』第47号にその要旨を掲載した。

日・中両国における漢英辞書の研究

尾崎 實

昭和63年5月2日から同年5月31日まで、近代漢語の研究者・元上海教育学院教授胡竹安氏を招へい、研究員に迎えて、以下の研究活動を行った。

1) 言語班との共同研究——元明白話の特殊構造の語彙について——

2) 在関西地区の研究者との研究会——『元曲』『金瓶梅』『水滸』の語彙と語法について——

3) 研究所研究員との学術交流——5月18日、講師胡竹安氏、テーマ「『水滸伝語言詞典』の構想と

問題点」の講演会——で通訳を担当。

・個人活動

昭和63年5月18日、研究員例会で口頭発表。テーマは「ロブシェイドの『英華字典』をめぐる」

漢語史における外国資料の研究

日下 恒夫

前回のテーマで主たる研究対象とした老舎については現在も基礎的な仕事を継続中である。年譜については、抗戦時期のおよそ半分の1942年までは整理を終えた。文献書誌に関しては、先に発表した『日本における老舎関係文献目録』(朋友書店)の増補改訂版を本年中に再発行の予定。言語と文体の問題に関連した基礎作業として、長篇小説『猫城記』、中篇『我這一輩子』、短篇『月牙兒』のテキスト対校を完了。『四世同堂』の英訳本とその中国語重訳本の翻訳態度と資料的価値については本年八月北京にて開催される第一回国際老舎シンポジウムで発表するため現在準備中。なお、日本における老舎の研究と翻訳史について五月をめどにまとめつつある。その一部としては、すでに「我与老舎」を『世界紀実文学』2号(河南)に、「ある噂——竹中伸訳『駱駝祥子』をめぐる」を『老舎研究会会報』7号に発表。その他、「老舎と西洋に関して——從猫經牛到駱駝」を『中文研究集刊』創刊号に、「対ということ——老舎の長篇小説に関して」を『関西大学中国文学会紀要』10号にそれぞれ発表。

今回のテーマについては清文資料を中心とした資料収集と目録作成を継続中。ただ、従来中国語学側からは殆んど無視されてきた満洲語部分の研究の必要性を痛感したので、現在は満洲語学書目を作成すべく資料収集を行うとともに、満洲語の学習を開始。今後数年で研究レベルにもってゆきたい。

現代中国語の外来語研究

鳥井 克之

『紀要20輯』に報告した如く、前期は現代における学術用語、とくに政治経済学用語を対象して研究し、その成果の一端として本学と姉妹校関係にある中国・遼寧大学学長馮玉忠主編『中国革命与建設的

諸問題』の経済関係部分（第4章より第11章まで）の翻訳を分担（他の政治関係部分の9章は芝田稔前研究員が担当）して、'87年3月に研究所資料集刊14『中国現代史——革命と建設の基本問題』を出版した。同書の索引（23頁）を西川和男氏他2名の協力を得て作製した。その際に延7,000枚の索引カードをとったが、それを資料として経済学用語における日中両国語の比較対照調査を行った。

今期は上述の調査研究結果を現代中国語における外来語研究の角度から総括するためにその分野での古典的名著と言われる北京大学中文系・高名凱教授と中央民族学院外文系・劉正坡教授の共著である『現代漢語外来詞研究』（1958年2月、中国文字改革出版社刊）を全訳し、研究所資料集刊16『現代中国語における外来語研究』として出版した。その後、原著者の劉正坡教授と数回面談することができ、現代中国語外来語について討議する機会を得た（高名凱教授は1965年1月に逝去）。

なお両原著者他2名の共編の『漢語外来詞詞典』（1984年12月、上海辞書出版社）に収録された日本語を源泉とする現代中国語の外来語をすべてカードに収録（約1,800語）して、『現代漢語外来詞研究』と対比しつつ日中文化交流の実態の一斑を考察した。

東西文化交流の研究

〈文学・神秘主義の比較研究〉（比較研究班）

比較文学研究

近代文学論争譜(続)——坪内逍遙の発想の再検討——

谷沢 永一

明治34年の10月12日から11月7日にかけて、『読売新聞』に連載された「馬骨人言」は、筆者を×××と記す匿名ではあるものの、当時から坪内逍遙に違いなしと推定され、のち逍遙も仮面を脱いで、自著『通俗倫理談』（明治36年）に全文を収録し、その意図を示す序章四篇を書き加えた。

この謂わゆる馬骨人言論争は、逍遙が理解した限りでのニイチェ理論に、強烈な拒絶反応を呈する罵倒を軸としていた。当面の敵を高山樗牛の「美的生活を論ず」一篇と見据え、樗牛を倒す為の戦術として、その範囲内でニイチェを撃つのが、逍遙の動機

のすべてであった。

しかし樗牛の抛り所がニイチェではなく、寧ろホイットマンであった事情は、拙著『机上の劇』に於いて解明した通りである。とは言うものの樗牛の親友である登張竹風が、早とちりの我田引水から、樗牛説はニイチェの敷衍であると論じた以上、樗牛は竹風に恥をかかせぬ為、敢て釈明を避けたらしい。この行き違いと誤解に乗じて、逍遙は怨敵を社会的に葬むべく乗り出したのである。

そして逍遙は自分の立場を、学者ではなく評論家でもなく教育者であると、巧妙にも限定して城壁を張りめぐらし、思想の存在理由を常識で否定するという、啓蒙家に独得の誤りを犯した。その間の経緯とメカニズムを、近く連載を再開して検討したい。

W. B. Yeats 研究

名取 栄史

私の課題は、Yeats, Synge ら、アイルランド近代劇を築いた人たちの劇世界の研究調査、より具体的にいえば、これらを生んだケルト世界の実態の一端に触れ、可能ならば現場に立っての作家、作品の再検討——疑問点の解明、意味の再考、資料の収集——であった。

(1)日本演劇、とくに能・歌舞伎との影響関係、(2)アイルランド劇に於ける神秘主義の二点を視座にとらえたことは言う迄もない。

“養老”のめでたさと異り“鷹の泉”はその傍らで生涯の大半を過ごした老翁に一滴の水も与えず、“錦木”の僧の供養で救われる男女の霊に対し、幽冥界で七百年の長きを許されぬ“骨の夢”の亡霊は恐らくや無限に添われぬ悲哀の放浪を続けねばならぬだろう。これら Yeats の『舞踊劇』各篇の悲劇は、単にアイルランドの歴史、ケルト思想にその因を求めるだけでは説明し切れない。むしろ作品の舞台であり、作家を育んだ風土——風土が思想を形成することは勿論であるが、それも含めて——にあらうという予想で、幸いその機会を得てアイルランド西部地方にイエーツ、シング、更にグレゴリー夫人の足跡を訪ねた。Yeats 以降のアイルランド劇作家の新作能をも含めて、機会を得て発表報告する予定である。

次に、神話を題材にしたイエーツ劇と農民生活を題材にしたシング劇の両者にそれぞれの運命観を手掛りに、超自然界と自然界に共通するケルト神秘主義の考察に入るべく収集資料の整理と検討を進めている。

Ezra Pound 研究

安川 昱

(1)日本の能がエズラ・パウンドの詩と詩論に大きな影響を与えたことはよく知られるところであるが、能はまたパウンド晩年の世界観にも色濃く反映している。今期は、後者について、能『景清』とソポクレスの悲劇『トラキスの女たち』がパウンドにとってどのような意味をもっていたかという点に焦点を当てつつ、パウンドと能に関する研究を進めた。

(2)当研究所の共同研究体系における従来の〈神秘主義研究班〉が〈文学・神秘主義の比較研究班〉と改められ、その枠内に「比較文学研究」の存在が認められた意義は大きい。そこでその門出を祝い意味で、偶々来日された著名な比較文学者（現国際比較文学会会長）でプリンストン大学の教授アール・マイナー博士を招き、特別講演会と座談会を開催した。（講演会、座談会及び懇親会については昭和63年3月31日発行の「東西学術研究所々報」第47号を、講演内容に関しては同日発行『東西学術研究所紀要』第21輯所収の特別寄稿を参照されたい。）

(3)アイルランド共和国ロングフォード州で毎年開校される第4回 Oliver Goldsmith Summer School の講師として招かれ、昭和63年6月3日(金)の開校日に“*How the Japanese Have Read Goldsmith*”と題する基調講演を行った。委嘱研究員のデズモンド・イーガン氏の推薦によるもので、Oliver Goldsmith 研究はイーガン氏と坂本武研究員の課題ではあるけれども、当研究所に〈アイルランド文学研究〉が創設されたことを内外の学界に知らしめる意味もあるので敢えて講師を引き受けたのである。5月31日から6月5日までイーガン家に滞在し、多数の詩人や批評家と懇談した。またダブリン市やミッドランド地方の文学散歩も試みた。

The Ancrene Riwele 研究

和田 葉子

われわれは日本語にはない英語の冠詞にいつも頭を悩まされている。ところが、古英語・中英語の時代から現在のような冠詞の用法が確立していたわけではない。冠詞の歴史的発達を考えることは、英語における数の概念がどのように出来上がってきたのかを知ることでもある。これが現代英語の冠詞の用法を解く鍵を与えてくれそうである。

手始めに、古英語以来の散文の伝統を受け継ぐ中心的作品の一つとされている *Ancrene Wisse* に現れる不定冠詞について考察してみた。

OE 期より存在した現在の不定冠詞に近い *an* と *sum* について前者は口語、後者は文語という以外はほとんど同じように用いられていたようであるが、AR ではこれらの使用頻度の比率が 10:1 になり、その意味も「何らかの～」に限定されている。

また Tauno F. Mustanoja は、叙述名詞あるいは前置詞の目的語としての、いわゆる「数えられる名詞」にはほとんどの場合、冠詞がつかない、と述べているが実際は例外が多い。このような統語的分類より文脈における個々の意味を考えてゆくのがよいであろう。文中のどの要素に属そうと、基本的には抽象性の高い名詞は不定冠詞を伴わず、概念が具体的になるほど不定冠詞とともに用いられるのが原則のようだ。従って、後者の場合は逸話やたとえ話によく現れる。

第3回研究例会ではトロント大学で制作されたビデオと、映画『薔薇の名前』を使って、中世の写本の製作過程を紹介した。

アイルランド文学の研究

—Oliver Goldsmith—

坂本 武

標記テーマの研究資料として今回 Goldsmith 全集 (London, 1852. 4 vols) が研究所資料として加わることになり、第一次資料の上での欠が一部補われたと思われる。今後なお資料面での充実を期したい。

昭和63年2月に東北大学へ赴き、附属図書館所蔵

の「漱石文庫」の内、Goldsmith 関係の 6 点の資料について調査を行った。これはわが国における Goldsmith の受容と影響の一例を調べるためのものである。Goldsmith の全集や個別作品、仏語による翻訳等の資料についてノートを取り、漱石自身の書き込みについても確認した。Goldsmith の他に Jane Austen 資料も調べてみたが、これは漱石晩年の「則天去私」の観念に Goldsmith と共に Austen も関わっているとされるためである。

上のノートを基に、昭和63年11月2日の研究例会において「Oliver Goldsmith と夏目漱石」と題して次のような内容の研究発表を行った。Goldsmith がわが国に受容されてゆく形は三通りに分けて考えられる。一つは明治初期に外人教師達によって教科書として取り上げられた、云わば講壇の Goldsmith、二つ目は種々の翻訳を通しての一般読書界への影響力として、三つ目は実作者への本質的な影響力として。この実作者の代表として漱石が挙げられるが、その影響関係は今日の庄野潤三・小沼丹のような作家にまで及んでいる。

神秘主義の研究

仏教の神秘思想の研究

丹治 昭義

インド大乘仏教の中観派は、無我を神秘主義的な空三昧等によって主体的に追求し、実現しようとした立場である。その到り着いた所は既に無我を単に神秘的体験として捉える神秘主義の立場でなく、体験を超えた空という実在を論理的に解明した理論的な哲学的体系である。中観派の創始者、龍樹はその主著中論でかかる哲学体系を示していると言える。それが三昧の神秘的体験に基くものであることは、中論第十八章に対する諸注釈を思想史的展開として読むとき、明らかとなる。かかる神秘主義を突き破った実在が空であり、その主体的実現は覚りであるが、その覚りにおいては沈黙と教説、形而上学の否定と仏教の形而上学が同事として成立する。この結論を本研究所在研究叢刊 6 として「沈黙と教説」という題で昭和63年3月に出版した。

沈黙と教説の同事性として示される仏の覚りは、しかし、唯識派の論理主義・認識主義とは全く相容

れない。唯識派のディグナーガは仏、即ち覚りを、認識 (pramāṇa) そのものであるとする。認識は知覚と推理とであり、それ以外に「教証」といったものはないと主張する彼は、仏の教説は正しい認識である知覚と推理の言語表現に他ならないとする。従って教説は知覚と推理に還元される。この点で沈黙を教説とする中観派と決定的に対決することになる。「チャンドラキールティの認識手段観」(南都仏教 59号 63年) は、この対決を取り上げて論じたものである。

Notions of Love in Japanese and Western Literature

by Morris J. Augustine

This research project centers in a comparative literary examination of notions of romantic love in the Japanese and Western literary traditions of the past thousand years. Though this is its focus its actual scope is much wider. It aims at examining the nexus between these two literary notions of love and the actual day-to-day living out of man-woman relations in the two societies: how changing worldviews and changing political, economic, and familial conditions and the literatures influenced one another.

The study first isolates ten core characteristics of love in each of the literatures.

JAPANESE LOVE

1. Typically, love is the glorious flower of human life
2. Love is "longing" (*koi*, 恋), for an absent lover
3. Neither *koi* nor any other word directly expresses love
4. Love is "to endure-remember" (しのぶ, 忍ぶ-憶ふ)
5. Better than words between lovers is silence—and secrecy
6. The male is dominant, once the woman freely gives her love
7. But the woman's love is stronger, so strong that she is helpless under its spell, "as in a dream" (夢中)
8. The flower of love has four seasons; and ends quickly
9. Passionate love is in the end vain and empty of meaning
10. Love is permeated with the pathos (哀れ) of its fragility

WESTERN LOVE

1. Typically, "real" love is forever.
2. Though a hard master, love ennobles the human heart
3. "True" love has a transcendent or divine dimension
4. Love is not, in essence, physical attraction; it is self-forgetful
5. Love involves a continual struggle between its Ovidian, or physical and ironic, and its Platonic-Christian, or ideal, elements
6. Man-woman love is a first step towards an all-embracing love
7. It is to be verbally expressed, directly to the beloved.
8. It is to be expressed passionately, graphically, insistently
9. Woman is the nobler lover; man learns love as her "servant"
10. Real love is in essence the same before and after marriage

Our study of these core notions aims at demonstrating that, 1) in spite of their treating the same human phenomenon these two sets of notions and attitudes towards love are very contrastive, but that, 2) both have continued to endure, in spite of much development and change, for a thousand years—and continue today, though often in the form of semi-conscious attitudes and values.

The problem we pose to ourself is how can these notions of and attitudes towards love have survived intact—though certainly not without immense change—through the revolutionary developments of values and worldviews which have occurred in both civilizations.

We focus on the phenomenon of Marsilio Ficino as an example of what actually has taken place in these changes, and how they have occurred. Stated in the briefest terms. The renaissance Italian thinker Ficino used his own renaissance notions to reinterpret (newly discovered) Platonic texts in order intellectually legitimize preserving ideas, values, and attitudes respecting love which Europeans did not want to part with, even though the medieval reasons legitimating them were no longer considered valid.

This same type of legitimating old beloved notions with new reasons has happened several times in both Japanese and western history. They served to help preserve from obliteration an ancient core set of notions towards love which each found to be successful strategies in dealing with this powerful and central human function. Love enters into a people's very identity as human beings. Favorite stories and poems not only hand on this identity; they also help to revise it and give it new relevance.

〈東西化交渉史の研究〉(文化交渉史研究班)

『諸蕃志』の研究

藤善 真澄

作業を続けてきた趙汝适撰『諸蕃志』の訳注は訳文を完成し、現在注釈文の完成を目指して鋭意続行中である。なお英訳との対校も終り、出版にむけて準備中である。

技術伝播の研究

水車の技術伝播とその定着過程について

末尾 至行

(1) 明治時代の水車の利用状況を物語る資料の一つに年次統計『徴発物件一覧表』がある。これは、国内での内戦・事変の際に軍部によって徴発可能な物件を調査し編纂した、陸軍省の手になる兵要統計であるが、兵糧米の精白手段も徴発の対象となつたとみえて、精米水車もその中に収められている。同様の趣旨で編まれた明治10年代前半の『共武政表』が、人口100人以上の集落だけが調査対象にされ、それ故に水車の数も全国で1万余を数えるに過ぎなかったのに対して、10年代後半から20年代にかけての『徴発物件一覧表』では調査対象がすべての集落に及んだため、水車の数も5万余が把握されている。当時の水車の圧倒的多数が精米用であったことからして、この水車統計のもつ意味は大きく、筆者はそのデータをもとに、当時の水車の分布状況、経年変化などを分析し、併せて注目すべき水車集落については実地調査を施した。

(2) トルコ共和国が今日所在する小アジアは、紀元前1世紀に世界で最初に水車が用いられ始めた地域として知られているが、また今日でも多数の製粉水車や揚水水車が活躍している地域としても興味深い。筆者は過去3度にわたってトルコの水車を実地調査し、文部省の「研究成果公開促進費」を受けて63年度中にその成果を刊行した(『トルコの水と社会』)が、別に63年度も文部省の「海外学術研究」科学研究費の交付を受けて改めてトルコに赴き、実地での見聞を広めることができた。また、水車技術は小アジアに発して洋の東西へと伝播したのであるが、近くは東ヨーロッパにも当然伝わっている。上記の「海外学術研究」調査ではトルコに加えてハンガリーにも1カ月間滞在し、各地で水車関係資料の収集に当たった。

堺緞通の発展過程

角山 幸洋

日本への中国緞通技術の導入は、元禄年間に「鍋島緞通(佐賀緞通、扇町緞通)」へ、そして天保年

間には泉州堺と播州に伝えられ、敷物として畳の生活に加えられるが、国内での消費は伸び悩みであることから輸出にふりむけられて、とくにアメリカへ輸出された。

第二代堺商業会議所会頭の藤本荘太郎は、とくに緞通の地場産業に力をいれ、輸出に努力をはらったが、羊毛では既存の絨氈と競争するため、安価な廃物利用として輸入される「麻袋」をほぐして麻緞通とすることで、生産の拡大をはかり輸出を伸ばした。それは伝統的なペルシャとトルコ緞通によって支配される市場に、わが国が参入するには、このような独自な方法しかなかったのである。

この用途は、部屋の敷物にするほか、寝室の靴脱ぎ、風呂の湯上がりを使用するとかの用途があり、庶民の間に安価であることから需要がみこまれた。これも限度があり、製造業者間の値引き合戦と品質低下を招き、消費者の信用を落とすことになる。

明治28(1895)年には輸出量は頂点に達するが、品質の問題、とくに脱色・汚れなどにより、需要が著しく落ち込み、さらに明治30(1897)年から発効する保護関税によりアメリカへの輸出は減少するほか、中国緞通との競合にも破れ、輸出産業から脱落した。

戦前の「安かろう、悪かろう」という日本製品にたいする見方は、この商品ばかりではなく、あらゆる商品に適用することができる。ただ緞通のようにもともと日本に存在しなかった商品であり、それを国内消費の不振から、輸出向けに転化させ一時的にせよ拡大生産をはかることができた。

この発展過程については、『東西学術研究所研究叢刊』として刊行するべく印刷中である。

明治・大正期における煉瓦造技術

山田 幸一

京阪神地区を中心に、明治・大正期に建設され現存する煉瓦造建築、及び現存しないが記録保存されている同種の建築計約100棟につき組積法と開口部の取扱について調査・分析し、次のようなことを明らかにし得た。それらの殆どは従来から常識的にい

われていたことであるが、本研究では統計学的手法を用いてそのことを立証した。

煉瓦造は明治開国期に初めてわが国に導入された工法であるから、初期の建築は全て外人技師の指導によらざるを得なかった。この時期の組織法はフランス積によるものが圧倒的に多い。これは当時のヨーロッパ等における流行の一端を示すものであろう。しかし時代が下るとともにイギリス積が次第に増してくる。これは日本人が独力で設計する能力を持つと、強度面がより重視されるようになったためと思われる。明治23年の濃尾震災を境にその傾向が加速していることも、その間の事情を物語っている。

煉瓦造では壁体は原則として耐力壁となるから開口は必然的に小さくせざるを得ず、特に幅が狭くなる。その結果、開閉の方法は窓の場合、建具を上下にスライドさせる「上げ下げ窓」が、出入口の場合は堅軸で回転させる「開き」が最も合理的ということになり、各年代を通じて不変の形となっている。

「上げ下げ」も「開き」も在来の日本建築では馴染みの薄いもので、やはり木造建築からは発想されない開口上部のアーチ意匠と相待って、煉瓦造建築により異国趣味を感じさせることになったものと思われる。

イブン・ジュバイル『旅行記』の研究

藤本勝次・池田 修・福原信義

イブン・ジュバイルは、12世紀後半のアンダルス生まれのムスリム旅行家で、その旅行記は美文體のアラビア語で書かれていることで有名で、アラビア語学のうえからも研究に値する文献である。また十字軍時代のイスラム世界の社会状態を知るうえでも欠かせない貴重な史料である。特にメッカの記述は詳細で、多くの文献に引用されている。この数年の間、定期的に輪読会を続けてきたが、在阪のアラビア語研究家の任意の参加も得て、この度、本文の翻訳をいちおう完了し、目下訳語の調整及び統一の作業に入っている。今後、地名や人名に関する注の作成を行い、出版の準備段階に移ろうと考えている。